

『柴田剛中欧行日載』より

君 塚 進

【要約】 いわゆる阿港兩都開港開市延期交渉の爲、竹内保徳を正使とする一行が、文久元年（1861）にわたり、欧州六箇國に派遣された。この一行は、それが鎖國のあと最初の欧行であり、かつ当時日本との間に最も外交上問題の多かつた英・仏・露（樺太定境の目的もある。）へ使することからして、各國事情の偵探が、また大きな目的であつた。組頭柴田剛中の日記によれば、全行程は、(一)、往路、(二)、五箇國巡行、(三)、普仏再渡、(四)、復路に分けられるが、ここでは(一)を紹介する。江戸出發（十二月二十二日）後最初の外地香港には、事情探索に一週間の滞在をしているが、これには当時の米國の南北戦争の影響があつた。以後シンガポール（太平天國の乱を探る。）をはじめ、英アジア政策上の要点を辿り、エジプト（トルコ領）を経て、マルセーユに到着（三月五日）しているが、エジプトおよびマルタでは「仏英先後渡」の紛糾が起つた。これ等實際の体験により、一行の国際感覚は大いに高められた。

昭和三十六年春、私は縁故から若干の文書を借読することとなつた。それが柴田貞太郎欧行の際の日記である。165種×125種の大ききで、毎頁十行（淡青色縦罫）に、大凡一行四十字の毛筆細字が記された和綴本三部である。各々同じ淡褐色の表紙を付し、多少の虫損がみられる。

日載 一 従文久酉十二月廿二日 仏
至戊六月五日 英〔紙數一〇八枚〕

同 二 従戊六月六日 蘭 李仏再渡
至同十一月十四日 李 葡〔紙數一〇〇枚〕

魯 帰航

同 三 従戊十一月十五日 帰航 欧州帰朝
至亥三月晦 京阪地旅行 〔紙數四二枚〕

文久元年三月二十四日（1861.5.3）、徳川幕府は、あたかも同月あらたに外国奉行を兼任したばかりの勘定奉行竹内保徳（下野守）に対し、欧州四國（仏英蘭魯）派遣を命じた。すなわち安政七年（万延元年（60・2・4）11・9）の使節新見正興（豊前守）等および軍艦咸臨丸の米國派遣に続いて、使節欧行最初のものであつて、

今日を去るまさに一世紀にあたつてゐる。この欧行の公私顛末については、外務省の諸資料のほか、一行の随員若干の者の記が知られている。即ち、西航記（福沢諭吉）、遣欧使節航海日録（野沢伊久太——副使松平康直従者）、尾蠅欧行漫録（市川渡——同上）、欧西紀行（高嶋祐啓）などで大略の全行程が、又福沢の自伝や多くの隨筆、書簡類や福地源一郎（桜痴）の諸著など比較的多くの断片的記述によりそれぞれの部分が窺われ得る。しかしそれらの記述乃至所論にはいづれも参差があり、彼等の一行中に占めた身分的立場などからしても、必ずしも行動の全般を示すに至らない。ここに随員首席として使節を補佐した柴田貞太郎剛中の日載を紹介し、これを中心として更にこの幕末最初の欧州行を明らかにしたいと考える。

柴田剛中は、号恬斎、通称貞太郎。父良通（徒目付）の長子として文政六年一月十七日（1823）江戸小石川に生まれた。十歳の時父死し、天保十三年徒目付となる。嘉永六年勘定として評定所勤務、安政元年評定所留役助、翌年四月同留役に累進し、用扶持二十人扶持であつた。安政五年八月出張先野州より帰府（中帰）の際身分進転の内談があり、九月十六日竹内保徳と会談している。同月二十五日外国奉行支配組頭となり、高、役料とも五百俵を給せられ、江戸へ神奈川を往復、特に神奈川開港（安政六年六月二日開港）につ



柴田貞太郎剛中
第一回欧行時、オランダにて撮影（部分複写）

いて勤勞している。以後頻繁化した欧米外交官吏との交渉、外人殺傷事件の処理や貨幣兌換問題解決に努め、いわば外交の第一線にあつた。文久元年正月布衣仰付けられ百俵を増された。なお欧行の後、帰着直後に外国奉行並（場所高千石）に昇任、文久三年十一月外国奉行として箱館に在勤し、十二月諸大夫となつた。そして慶応元年閏五月には製鉄所建設（並びに軍制調査）のため、正使として再度仏英に派遣され同年十一月末帰朝している。三年大坂町奉行外国奉行兼帯仰付けられ、ついで七月兵庫奉行（大坂町奉行外国奉行兼帯）として兵庫開港や大坂居留地御用の任にあつた。慶応四年正月御役御免、四月依願隠居の後には上総国へ退休、明治新政府には出仕せず。しかしながら新政府の外交関係につき諮問を受け屢々上京、東京淡路町に寓居を購入し、結局ここで明治十年八月二十四

		年	表		
		(相手国)	(調印)	(批准交換時期)	
1858.	7. 29	(安政五・六・十九)	米	修好通商条約	1860. 5. 22
	8. 18	(七・十)	蘭	修好通商航海条約	3. 1
	8. 19	(七・十一)	露	修好通商条約	1859. 8. 8
	8. 26	(七・十八)	英	同上	7. 14
	10. 9	(九・三)	仏	同上	9. 22
1860.	8. 3	(万延元・六・十七)	葡	同上	[1862. 4. 8]
1861.	1. 24	(十二・十四)	普(ロシア)	修好通商航海条約	[1864. 1. 21]

日死去している。時に五十五歳であった。なお後に記する永持五郎次は、剛中次弟亨次郎(永持家を継ぐ。長崎伝習生の一人であり、後に御目付介となつた。)の子である。

二

使節の目的の第一は、いわゆる両港両都開港開市延期交渉であつた。

年表に知る如く、勅許をまたず締結された日米条約以後、踵を接して締結された各国との条約中に、59・7・1(安政六年六月二日)開港の長崎・箱館・神奈川三港の外に、予定期日60・1・1(但し、59・11・18)に開港延期を五箇国へ通告あり。の新潟、63・1・1の兵庫二港の開港と、同じく62・1・1の江戸、63・1・1の大坂両都外人在留許可の条項があつた。しかしながら、

当時の情勢は到底これらを履行し得ぬものがあり、国内鎖攘熱の熾烈さは、安政六年の露人殺傷以後万延元年の米公使館追弁官ヒュースケン殺害まで、一年四か月余に六の不祥事を数え、さらに61・7・5(文久元年五月二十八日。使節派遣決定後。)には英国仮公使館品川東禅寺襲撃事件まで惹起せしめられている。閣老安藤対馬守信

行はここに延期の策をたて、英公使オールロック(Rutherford Alcock)と60・8・7(万延元年六月二十一日)接触し、また仏米公使とも談判を開いた。各国公使もまた事情やむを得ずとして、必ずしも延期を不可としなかつたが、各本國政府へ幕府の要求を傳達した。以後対馬守はオールロックの力により延期の同意を得ようとしたが、同公使は仏公使ド・ベルクール(De Bellecour)とはかり、幕府に対して、新見正興、村垣範正等の遣米使節の例からしても、日本政府はよろしくその重臣を使節に任じて欧州の締盟諸國に對し聘問の礼を行うべきを論じ、使節旅行の便は米國の先例(送迎艦ボートハン号)にならぬ、英仏兩國において担当すること、而して使節により、直接各國政府に對して延期を請うならば、或いは応諾もあるべきかのことを申し入れた。この意見に従い対馬守は、使節派遣を閣議に提出し、断然これを決定した。

右のことが目的であるが、最初の欧行のこととて、訪問各國、および行途全般にわたつての、貪慾なまでの事情探索が実は大きな目

的となつてゐる。極東を舞台として角逐烈しい英仏兩國、さらにクリミア戦役終結(56・3・20。パリ平和条約)後、東方指向の度を強めた露の三国に入ることは、「対外地位において、危機一髪の間にある」(オールコック)日本の最近の前途に対して、その見聞実証による判断がいかに重大な影響を持つかは、一行の大部分が外国奉行所勤務として在るだけに、深刻に銘肝していたことは疑いをいれない。また薩摩、長州をはじめとする諸藩よりの参加者も、国内での立場の相違は別として、同じ覚悟であつたであろうことは明らかに察せられる。福翁自伝にも「何でも有らん限りの物を見やうと計りしてゐる。」の言がある。

さらにこの派遣目的の一つに、いわゆる北地境界治定の問題がある。52・8・9の露艦メンチコフ号下田入津以後、翌年使節プーチヤチンが艦隊を率いて長崎へ来航し、54・1、再来には、はやくも幕府邸接掛筒井政憲、川路聖謨との間に、定境に關し交渉を始めてゐる。この時は、通詞森山多吉郎の機敏な行動もあり、決定に到らぬまま退去しているが、その後長崎、箱館、大坂、下田と頻りに来航し、55・2・7(安政元年九月十八日)、下田において二か月余の交渉の後、幕府は露国との間に和親条約を締結した。(批准交換、56・12・7)。

今より後日日本国と魯西亜国との境「エトロブ」島と「ウルツ

ブ」島との間に在るへし「エトロブ」全島は日本に属し「ウルツブ」全島夫より北の方「クリル」諸島は魯西亜に属す「カラフト」島に至りては日本国と魯西亜国との間に於て界を分たす是迄仕來の通たるへし

はあまりにも有名であろう。この樺太を、両國人雑居の地として残した点を、再び問題にしたのが、61・9・24、露艦隊司令長官リカチコフ、および領事ゴスケヴィッチと、幕府箱館奉行との会談である。クリミア戦役終結後、同年使節ボンシェット、翌々年のプーチャチン来航と相前後して、先年の例を踏むかの如くに、樺太久春内に露人二十数名が渡來し、永住の計をなしている。修好通商条約締結以後、露東部シベリア総督ムラヴィヨフの来航と、前記暗殺事件などがあつたが、就中露艦ボサドニック号等の対馬占領の企圖は、遣欧使節決定時期での最も憂慮された問題の一つであつた。使節の正使として、竹内保徳が任命されたのも故なしとしない。

竹内保徳(1806〜) 通称清太郎。父を後継して幕府勘定方に
出仕し、累進して組頭より吟味役となる。安政元年、箱館奉行
所の再置とともに、奉行に任じた。樺太定界問題には、当時よ
り、北緯五十度線をもつてすることを幕府に建議している。文
久元年正月勘定奉行、三月外国奉行を兼任した。

竹内任命後日ならずして、対馬では、ボサドニック号乗員と対州
藩民農兵との衝突、建築物造営、土地割譲要求などがあり、幕府は

小栗忠順を派して折衝したが、不得要領のまま帰府する有様であった。結局、領事ゴスケウイッチとの交渉により、ボサドニック号艦長ビリレフの独断専行と決まったが、更にその退去を見るには、英提督ホープ中将の率いる艦隊の出動を仰がねばならなかつた。(なお、英艦隊出動には、オールコック、ホープ、および香港知事ロビンソンとの会談において、京都の反対最も甚しい兵庫に代えて、公使が対州の開港を希望する状勢を看取り、その開港の氣勢を示して、露艦退去談判に助力を求めた閣老安藤対馬守の苦心があつた。) 同年9・29、露艦対馬を去り、一応平穩となつたものの、一方では、箱館奉行所より派出した水野正太夫等の、露領貿易および国情調査(9・13帰還)の報告も入り、幕府は11・15、竹内保憲等に樺太國境を北緯五十度となすべく訓令している。

目的のいま一つには洋書籍の購入とともに、機械購入のことがあつた。英國滞在中に使節一行を追及してきた、前記森山等の持参した御用状中に、長崎稻佐において蘭人の手で建設された製鉄所に必要な製鉄(工作)機械購入書引替分があつたことは、その後蘭到着の直後から、製造会社側の熱心な働きかけのあつたこと、そして結局、蘭ロッテルダム所在の会社に、注文を發していることと共にその証であらう。

プロシアおよびポルトガルへの使節派遣は、当初は予定されていなかった。前記の年表で知るように、批准書交換が恐らく理由であらうと思われるが、四月二十六日に、柴田は「李葡兩國使節有無」の建白案を草している。従つてその後追加され、合計六箇國へ派遣となつたものと思われる。

三

文久元年四月一日、柴田は外国行御用取扱を命ぜられ、以後同人組下を中心にして、自薦他薦の志願者が続出するうちを人選がすめられた。此の間には、東禅寺事件の発生もあり、又、対馬をめぐる緊張や、小笠原諸島再度開拓のため、外国奉行水野忠徳(筑後守)等の出発(咸臨丸による。)などがあつた。

正使 竹内下野守保徳

外国奉行兼勘定奉行

従者 高間応輔

長尾糸助

副使 松平石見守康直(棚倉藩主)

外国奉行兼御用奉行

従者 野沢郁太

目付 京極能登守高朗（丸亀藩主）

市川 渡

通詞

太田源三郎④

從者 岩崎豊太夫

備通詞 備翻譯方兼医師

福沢諭吉（中津藩）⑤
箕作秋坪（津山藩）⑥

黒沢新左衛門

同

松木弘安（薩摩藩）⑦
川崎道民（蓮池藩）

組頭 柴田貞太郎

外国奉行支度頭布衣

從者 永持五郎次

役々召連者兼賄方

佐野哲輔（加賀藩）

勘定

日高圭三郎

杉 徳輔（長州藩）⑧

勘定格徒目付

福田作太郎

石黒貫二（肥前藩）⑨

医師

高嶋祐啓①

岡鹿之助（肥前藩）

調役並

水品樂太郎

原 覚藏（阿波藩）

同

岡崎藤左衛門

佐藤恒藏（杵築藩）

普請役

益頭駿次郎

重兵衛⑩

定役元締助

上田友輔

定役

森鉢太郎

定役並通詞

福地源一郎②

同

立 広作

同心

齊藤大之進③

小人目付

高松彦三郎

同

山田八郎

勘定格調役

洲辺徳藏

調役兼通詞

森山多吉郎⑪

なお左記兩名は、オールコックの賜暇帰国に随伴して、62・3・23（文久二年二月二十三日）江戸を発し、5・30 ロンドン到着、一行と合流している。

以上三十八名

① 1833～。幕府漢法表医師

② 1841～1906。長崎に生れる。父源輔（苟庵）。蘭語を学び、安政四年蘭語古通詞となり、翌年江戸に來り、外国奉行水野忠徳、柴田、森山、矢田堀景藏（長崎伝習生の一人）等の庇護をうけた。安政六年神奈川開港後、外国方へ奉職。（柴田は父源輔と親交があり、友誼の交換は頗る頻繁であつた。江戸における源一郎に対する、一種の保護監督者的立場にあつたらしい。）帰朝後、元治元年、調役並格となり、通弁御用頭取に任じ、慶応の柴田第二回渡欧に際して随行している。慶応三年には、下谷二長町に英仏語私塾を開く。明治元年、木版刷の江湖新聞を刊行したが、旧幕府擁護の記事により投獄された。出獄後静岡藩学校御用掛となつたが、十二月徳川家臣の列を離れ、湯島天神下に英仏語共慣義塾を開いた。明治三年、伊藤博文に随い米國に行き、翌年岩倉具視に随い（一等書記官）三たび渡欧した。その間パリにて一行と別れ、ギリシア、トルコ、エジプトを廻つた。政界進出の意を持つて準備をしていたが、帰朝後政変の頻発に嫌氣して、在野のまま民衆指導を志し、東京日日新聞社長となる。西南役には従軍記者として参加、明治天皇に謁して奏上を行つた。のも東京府会議長となる。要するにジャーナリズムの第一人者であつたが、明治二十年新聞社を去り、歌舞伎座創立、傍ら脚本創作も行つた。三十七年代議士として憲政本党に属し、三十九年一月死去。六十六歳。

③ 1823～71。上野の豪農の出身。天保中諸國巡歴の後、幕吏として佐渡、長崎に在勤し、安政末年外国方に入つた。文久元年

の東禪寺事件当時は、宿衛の任にあつて奮闘し、後年英國政府より行賞されている。文久二年旗本に列し、欧行帰朝後、神奈川奉行所改役となつた。維新後は新政府に出仕し、明治四年死去、従五位をおくられている。

④ 1835～95。長崎出身。家職の唐通詞の傍ら英語を修し、安政六年神奈川奉行所勤務となつた。維新後越前侯に招かれ、藩士に英語を教えた。明治六年東京府六等出仕、ついで工部省鉄道局権頭となり、従五位。七年、大久保利通に随い清國に行く。明治二十八年死去。

⑤ 1834～1901。

⑥ 1825～86。父菊池文理の次男。十九歳で江戸に出、古賀何庵、ついで箕作阮甫の門に入り、蘭学を学んだ。弘化四年大坂に至り、緒方洪庵門下生となり、蘭学と医を修めた後、嘉永三年阮甫次女を配され、六年幕府天文方に入つて翻譯に従事した。安政二年阮甫隠居により、藩主侍医となつたが、安政四年、藩命により幕府外国方に勤務し、一時は蕃書取調所教授職手伝にもなつた。（欧行志願の意は、四月四日に書面を持參して柴田に面談、大略選中にあるを知つたようで、その後は従弟を推薦などしている。）元治元年幕臣となり、慶応二年箱館奉行小出秀実に随いロシアへ行き、樺太分界交渉に従つた。明治元年隠居し、明治六年、福沢や西周、中村教輔等と共に明六社をおこした。十九年死去。奎吾。菊池大麓、佳吉、元八、坪井正五郎妻直子の父である。

⑦ 1833～93。薩摩藩和泉郷の陪臣で、後年、寺島宗則と名を改

めた。十六・七歳の頃、藩医につき蘭医学を修した。維新後、神奈川県知事、外務大輔、英特命全權公使、文部卿、法制局長、元老院議長、駐米大使等の要職を歴任した。明治十七年宮内省出仕、伯爵。二十四年枢密院副議長となつたが、二十六年死去。従二位勲一等。

福沢、箕作、松木の三者の親交の深かつたことはよく知られ、福翁自伝などにも詳しく示されているが、松木欧行志願も、他の兩名の周旋があつたことを思わせる。福沢は箕作とほぼ同じ頃、二度にわたり柴田を訪問し、人選を知つたらしい。松木はややおくられて、先ず森山を通じて意を述べ、五月二十三日の訪問は来客中の為会えず、六月十一日に柴田と対面している。手土産の唐团扇二本などの微笑ましい記がある。その後も八月十九日に、欧行の模様聞き合せに出たりしており、決定は比較的遅かつたらしい。

⑧ 1835～1930。後年、孫七郎と称す。植木五郎右衛門次男として出生し、杉彦之進の養嗣となる。明倫館(萩)に学び、吉田松陰に師事した。藩命により欧行。帰朝後、藩参政として活動し、維新後は秋田県令、宮内大輔、東宮御用掛等々を歴任し、明治三十年枢密顧問官となり、三十九年議定官を兼ねた。大正九年死去。子爵、従一位。

⑨ 藩学社精煉社にて、中村奇輔等とともに、発電機より電信機に至る研究(安政四年には、実用に供するに至つてゐる。)をした。

⑩ 外国方用達、伊勢屋八兵衛手代。

⑪ 代々、長崎詰の蘭通詞の家に生まれ、英語にも通じた。前述54・1露使プーチヤチン長崎米航の際通訳をつとめ、プーチヤチンより応接掛に、樺太定境問題の提起があつた時、さきに露艦臨検の折、船室に掲げてあつたオランダ版地球図に、北緯五十度をもつて、境界としてあるのを発見した旨を内報し、我方主張の根拠たらしめた。後、ペリー米朝の時、幕府に徴せられて任にあつた。欧行帰還後、通弁頭取、外国奉行支配調役、兵庫奉行付組頭を歴任し、維新の後は辞して仕えず、東京に没した。

随員一行のうち柴田直属の者では岡崎が、竹内保徳より柴田に内命のある前日に、早くも欧行志願を申し出ていることなど、まことに今日的に思われる。森山は当初から、同行決定の模様であつたが、中途に変更があつたらしく、出発一週間前において、柴田と協議しているのは、前記の追及の予定されていたのを思わせる。淵辺も四月七日の内意尋問に、留守役は意無し、と述べている。その他はやくより柴田の意中にあつて、三使も承認済みであつたらしい。佐野、岡等の同行は、大体十月中に決定したようで、それぞれの藩よりの挨拶があつた。

十一月一日付をもつて発令があり、柴田は御目見御暇拝領物(金三枚時服二羽織)仰せ付けられた。三日、神奈川においてオールコック、使節迎艦々長ヘイ中佐に一同紹介のあと、打揃つて艦を見ている。翌日は公使館にて会談し、五日、付添係官英人マクドナルドと対面の上、種々打合せが行なわれた。以後、柴田は公私繁

雜の所用を差配して、十二月二十一日、關老安藤對馬守邸において、英公使と艦長および三使節、ならびに彼我士官一同会同して宴を設け、ここに出發準備が完了した。

四

1662・1・21 (文久元年十二月二十二日)、使節一行は、英国軍艦オージン (Odin) 号に塔乗し、翌早曉品川沖を解纜して、欧州への途にのぼった。

この巡行を通観するとき、63・1・29 (文久二年十二月十一日) の品海三田上陸場上陸まで、都合一年九日間を、次のごとく区分し得るように考えられる。すなわち、

(一) 往路

乗艦よりマルセーヌ着 (4・3) まで。

73日

(二) 五国巡行

I、仏。マルセーヌ上陸より、カレーにおける渡船乗組

みまで。(4・3) ~ (4・30)

28日

II、英。ドーヴァ上陸より、蘭迎艦アルジーノ号塔乗ま

で。(4・30) ~ (6・12)

43日

III、蘭。アルジーノ号乗艦より、ユトレヒト市長招待ま

で。(6・12) ~ (7・16)

35日

IV、普。ユトレヒト出發より、露迎艦スメロイ号シュテ

ッティン出港まで。(7・17) ~ (8・5)

20日

V、魯。シュテッティン出港より、ペテルブルグ駅出發

まで。(8・5) ~ (9・17)

44日

(三) 普、仏再渡

ペテルブルグ出發より、ロシュフォール港において仏送

艦ライン号搭乗まで。(9・17) ~ (10・6)

20日

内、普滞在4日、仏滞在14日。

(四) 復路

ロシュフォール出帆(10・7)より、帰着上陸まで。115日

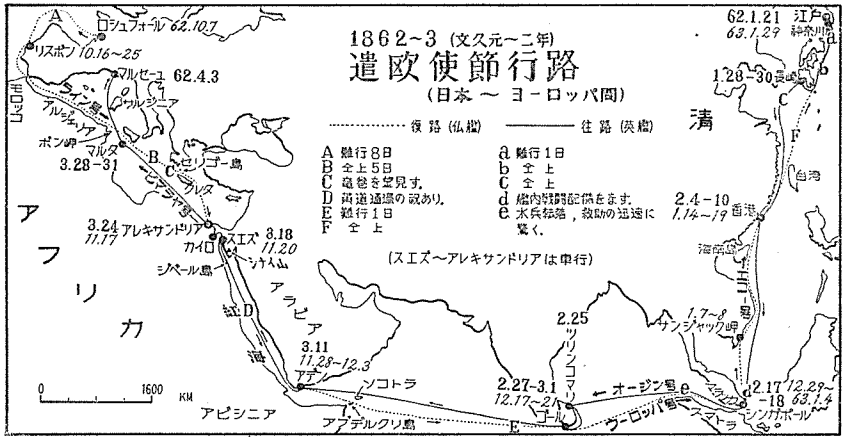
内、葡滞在10日。

である。

以下の本稿では右の区分のうち、主として(一)の往路について些かを述べてみたい。

(一)をさらに区分するならば、出帆より長崎寄港を経て、香港入津に至る慣れぬ船旅、最初のいわゆる外地である香港での行動と見聞、以後スエズに至るまでの一連の英領港市瞥見、エジプト(カイロ中心)、および英海軍基地マルタの五部になるであろう。

品海出帆後、神奈川にて仏公使下・ベルタールの見送りを受け、



通詞太田を加えて後、先ず一行は激しい冬季季節風の洗礼をうけた。長崎に寄港したのは、船中石炭の消耗に、補給の要ありとの艦長の判断に由っている。通例、出入港にのみ、蒸気力を使用する外輪機帆船であるから、西風を受け「傾度二十五度を過」ぎては、壮途最初の緊張期にあつても、船酔いは致し方なく、上甲板に使節一行用に特設された炊事室も、機能

を発揮するに至らなかつた。「庖奴小遣なりも術盡て貯へ来れる餅を焼て飯ニ替へて出せり勿論庖奴も多くは枕に就き其餅を喫するハ野州(正使)と余の外鉢太廣作のミ也」という状態である。

映舌露々黒漆奴 捲帆転楫縦横趨
衝波疾似離絃矢 総嶺房山看欲無

慣れぬ航海に苦しんだ一行にとり、長崎寄港はまことに好都合であり、それは又、あたかも前年四月に竣工したばかりの、稲佐郷砲之浦のいわゆる製鉄所を見学する機会を齎らした。「場中ノ蒸気機関千奇萬巧其萬一ヲ詳悉スル能ハスト雖……数十ノ少車一齊ニ旋轉シテ鍛鉄煉鋼之ヲ切之ヲ瑳之ヲ磨シ各々ノ百巧ヲ一時ニ製成ス実ニ精妙奇絶千古未曾有ノ機関トモ謂フヘシ」(尾繩歐行漫録)と、一行中初見の者が多かつた。

明けて文久二年元旦、長崎を出港し、一路香港へ進んだが、雑煮を喫し、医師高嶋の調剤による屠蘇を酌んだものの、再び一同船酔いに沈湎するはかなかつた。四日には、揚子江口近くを通過したらしく、海水の泥濁を見て柴田が、その理由を尋ねたところ、「海底浅きが故」の説明を受けたので、更に水深を尋ねている。百八十呎前後との答に、「海底浅しといふ説当らず濁水は江河の流末ニ当るといふ説可ならん」と、知識の実証を計つているのも興味がある。

同様の地理的知識を確かめる例は、シンガポールにおいて、「土人

の黒色なる、度数の近が故ならず其土の地味ニよる所あらんか」とし、又、「紅海は海水紅なるの故を以て名けたりと常に聞りしニ海

色青藍常ニ変る事なし英人の説ニ当海は多く珊瑚を産す依是紅海の名あり海水の色ニよるニあらずと此説取へきなきニあらず一説ニ海面紅色は季節ニよりて然り故ニ其名ありと暫く参考に備ふへし」、
などがあり、スエズよりカイロへの、車窓よりの景について、「同

所の地味を察するニ古昔一円の海なるとの説信をとるに足れり」、
としている。当時の日本一般の知識を推し得るものではなからうか。

航海当初においては、先ずその寓居たるオーゾン号の艦内描写がなされている。そして又それは、「黒船」の威を最も直接的に痛感した者として当然の態度であろう。艦内規則も、長途の護送責任を認識した艦長より、マクドナルドを經由して示されたが(十二月二十六日)、伝統ある英海軍のこと故、まことに嚴重であつたらしい。

「船中の規則嚴密ニテ甲板上下徘徊運動の場鎮台と余の外は上等士官ト下等士官并従者小遣と各々三所ニ分チ且風の模様ニより風上ニ当れる方は鎮台と余の外は徘徊せしめず殊に鎮台船将等会食の席江は余の外決て入らしめず鎮台の房に到るも士官輩は彼の士官に断らざれば猥に入るあたはず其他鎖末の規律数条ニして一同の苦情少からず朝々面を洗ひ口を漱く場所は圃と接し臭気満場其上暗々の一室其不潔譬ふるニ比なし且水至て少くして稍々もすれハ水瓶空敷ニ到

り熟讀數回ニ及び纒ニ一勺を持来れハ鉄漿の如し航海の苦尋常ならざるを知る」、といった態であつた。

副使従者等の記に「船中規則書」、「日本使節同勢の煙火宴所会食に附たる規則」、「食料の出し方」、および風向を示す揭示板について記述がある。

琉洋過盡又臺灣 萬里波濤一瞬間
忽地投錨香港口 眉端現出幾重山

六日香港入津にあたり、先ず注目したものは一個の岬上の廢屋であつた。「右は昔年英より支那ニ乞て一區の地を賃借し一字を設て以て香港全嶋を掠奪する基礎となす所の屋なりとぞ」として、最近の難事であつた對馬の例を之に比して、「可畏可戒」と記している。

長崎出島の先例にならい、隔離を目的に、神奈川(横浜村)開港工事を親しく実施してきた当事者であれば、しかもその工事が、殆んど意義を持たぬ無力さを、経験してきた者であればこそその感慨であろう。全世界が白人の活躍に圧倒されたといえる十九世紀後半の、その列國の帝國主義的植民地獲得競争の組上に、日本が置かれて脆い受身の立場にあることを知る一行が、最初の外地で、且つ最も日本に近い英艦隊基地ともいえる香港で、事情偵探に努めたのは当然である。それが防禦の観点からは、異製の船を注目し、又、武器工

場見学に、時間の不足を嘆せしめた。^②

① 港内ニハ浮砲臺三艘ニ備フ各少シツ、大小ノ差有ト雖大約長三十四間幅七八間高サ四五間三層造ニシテ一層毎ニ砲眼十七ヲ開ク平日ハ船夫ノ者ノ養病院又ハ藏庫ノ用ヲ爲シ置キ若緩急ノ事有ル時ニハ之ヲ砲臺ノ用ニ充ツルナリト(市川記)

② 鎗銃製造場ニ行此所幅三間半長七間許ノ一室中央四壁共偏ク鎗銃及劍戟ノ製成セシヲ懸タリ尤如此ノ場二箇所アリテ今現ニ製成ノ鎗銃一萬挺アリト云見了テ鎗砲場ニ至ル此局ハ最モ海岸近キ所ニアリ鎗製セン大煩ハ數所ニ並列又砲丸ハ丘ノ如ニ積成シタル夥多ノ數故皆算能ハス又其大數ヲ聞ニ違アラス勿々出去リシハ遺憾ニ堪エサリキ次ニ一局幅十二間長三十四間許ナル二層造ノ官舎ニ入此所ニ在シ支那人ニ何局ナルヲ筆語センニ第十九號武房便是ト書答ヘタリ依テ憶フニ如此各局ノ其總數ハ分明ニ聞知セサレトモ九十九場ニ下ラサルハ又自ラ明カ也(市川記)

一行の香港滞在は、前後一週間に及んでいるが、之には理由があった。米国においては、リンカーン大統領当選を端緒として、南北戦争が開始されており、文久二年正月は、それがまさに一か年を経過した時期に相当する。局外中立の立場ではあるが、英政府としては、南北戦争には、南軍応援の傾向があり、しかも北軍の海軍力は南軍に勝っていた。この認識から、英国出先官憲には、紛争惹起の懸念が強かつた模様で、特に当時は、インド洋上に米艦の存在する情報があつたらしい。シンガポールよりの、予定された情報を待つ

為に、滞泊を続けた訳で、結局新情報を得られぬまま、十二日に突然出発している。オージン号が、予定せぬ長崎に寄港して給炭し、荒天中を、艦上訓練を続けつつ、帆汽兩用をもつて急行し、使節一行を悩ませたことも、前記異容の船の目立つたことなども、肯ける訳である。さらに出発後の十八日夕には、「驟雨覆盆中」を突如、「園船騒々然大砲江玉込砲門近く引寄せ水夫等銘々小銃を提ケ陳列石州(石見守)部屋前物置所を俄ニ明ケ呉ル様申聞同所江小銃玉込のまゝ入置目今事あるの形勢あり」と、艦内戦闘配備のことがあつた。これも、翌朝入港のシンガポール港外に、米艦待機を考慮しての措置である。これ等一連の事実はまた、一行の国際感覚養成の面で、強い実物教育になつたことと思われる。

一週間の香港滞在期間中、一行はそれぞれに、事情調査に懸命であり、英華書院での図書蒐集をはじめ、見聞筆記に多忙であつた。(市川の記には、ホテル浴室備品描写までも存している。)ロビンソン(Sir Hercules Robinson)知事の公式訪問交換、招待、軍事訓練見学から、交互の市中巡覧など、自由港香港の持つ性格と、英国にとつての意義認識への努力がなされた。就中、中国への親近感から、欧人と中国人との関係を注目して、それらを日本への参考にせんと意が見てとれる。例えば

碇泊中日々代ル々支那船蟻附し水を売あり魚野菜をひさくあり

烟草履等を持来るあり諸器物玩具菓子菓実等其外諸物件を箱盛り
袱ニ包ミ本船ニ持登り沽込あり我邦ニ而ハ密商の患を謀りていま
た許さざる所なれども本船の不便宜萬々なれば遂ニは其禁を許さ
ざるを得べからん且甲板上ニ在て屢々注目注意せしに密商のある
へき躰なし併商船ニ至りてハ如何哉

とある如きは、神奈川港管理の役に当る柴田として当然であろう。
又、同じ意味からして、外交上の儀典に関するものに詳しく記述が
あり、これは、其の後の訪問各地においても続いている。彼は維新
後も、新政府の諮問に度々応じている処から、あるいは現行のもの
にも、彼の観察は、大きな影響を及ぼしているであろうと思われる。

その他興味ある記述として上陸時のものに、本船より祝炮十三
発を打放し上陸場ニは赤衣の銃手数千人列立後面ニは薬を奏し二
馬を附る乗車二輛を備へ一輛は石能兩州石見守 解登守。なお正使は滯艦。
一輛は余と源三(通詞太田)を乗らしむ余いままた車ニ登りし事な
く如何すへき哉問んと欲するニ源三の外人なし護卒衛士列居敵肅
の地味裁を失するハ老人の恥ニあらずと思ひ量りて傲然車ニ登り
て座を卜しかとも後また如何ともするを知らず胸中困却の折柄黒
漆の蛮奴アフアリ カ人 出来りて車前ニ乗り御して逆旅ニ誘へり心中初而
安キ得たり

とある。陸上交通手段として、徒歩以外は駕籠と乗馬が一般であつ

た、当時の日本人として無理からぬ処ながら、外国方という、欧米
に最も近い位置に在る者にして、この事のあるのは、鎖国政策の徹
底性を思わせる。(また現在と思ひ併せて、例えば車に対する感覚
というものも、短時日には養成され得ぬことを考えさせよう。)全
体として、いわゆる「好奇と驚異」からする地誌的記述が多いが、
とにかく香港での体験は、以後の旅行を通じて、各地に対する一つ
の比較基準となつている。

18世紀に顕著となつた英のアジア進出は、ヨーロッパにおいて、
仏軍がネーデルランドを占領し、オランダをバタヴィア共和国と宣
言(1795)して保護國化したことに由り、更に熾烈となつた。それま
でのアジアにおける蘭植民地は殆んど英の攻略する処となり、19世
紀の60年前後はその極盛期とも言えよう。ブラッシーの戦闘(1777)
後のインド全域への進出(セイロン島に英艦隊基地ツリンコマリー
建設)と共に、マライ地域にはピナン(1786)、同対岸ウェルズリ
ー地方(1800)に東印度会社が根拠地を得ており、セイロンにおけ
る蘭勢力との交替は1796であつた。1819のラッフルズの罫限と、
一25の蘭の撤退により、一26 シンガポールが海峡植民地化(クラ
ウン・コロニー化、1867)し、阿片戦争により香港(1842)が、そ
してインドの直接統治は實に1858のことである。(九龍半島割譲、

1860)。まさにその時期に、英艦に塔乗したが故に、使節一行は、英アジア植民の要地を辿つていつた。すなわち、正月十二日、慌しく香港を出発して、シンガポール、ツリンコマリ軍港（オーシン号所属基地で、乗組員所用の為寄港。一行上陸せず）、ゴール（又はガレ。コロンボは築港中であつた）、アデン（1839英領。三使節のみ予定を変え四時間程度上陸。）を経て、スエズに至つている。この間シンガポール、及びゴールに、各一日半上陸しているが、シンガポールにおいては、漂流日本人音吉に遇い、中国における太平天国の乱（1850～54）の概略の情勢を探つている。

① 或いは乙吉。尾州知多郡小野村出身、天保三年十四歳（又は十七歳）の時廻船に乗組み、サントーイス島（？）に漂着の後、外国（恐らく英。）船に、他の一名（当時中国福州に居住するといふ。）と共に救助された。その後諸地を廻り、シンガポールにて妻（インド人）と結婚し、子（当時三人）をもうけて帰心を捨て、上海に居住していた。偶然、妻の里帰り（病氣療養ともいふ。）に同行して、使節一行の到着を聞き、三日以前より、晝夜待ち受けていた。嘉永七年（安政二年（1854～55））の間に、英国東印度艦隊司令長官スターリングに従い、日英最初の条約である日本国大不列顛国約定、及び副章に関する交渉（三度長崎に来航している。当時長崎奉行水野忠徳、目付永井岩之丞。）において、通訳をつとめたといふ。

五

スエズ運河は当時建設中（56起工（69竣工））であり、一行はここではじめて英領以外の地に足跡を印した。すなわちトルコ領エジプトである。スエズよりカイロまで90マイルの間、途中の砂漠景観もさることながら、矢張り蒸気車が一同の関心の的であつた。柴田は三使一行より一日おくれ（荷物運輸指揮のため）、二月二十一日に二十輛編成の列車にてカイロに到着し、其の間、列車そのものと共に運行制度などを質しているが、前日の列車は六輛編成のため、余程高速で運行されたらしく、所要時間二時間余、「早き事誠に早きもの……左右も杭なども島（鷺）のよふにて不見分却て遠き所は見ゆ」（野沢記）とある。また市川の記は綿密を極め、客車の構造やレール一本の幅・高さ・長さをも測り、さらに列車の車輛数は増減可能であり「其車數多キニ至テハ凡三丁程ニモ続キタルヲ前頭ニ在ル一車の蒸氣力ニテ千萬里外ニ電馳セシム豈驚目駭心爲サ、ランヤ」としている。路傍の電柱も鉄橋やトンネルと共に、また関心をひくものであつた。

カイロ到着後は、例の如くに市中見学を行なつているが、宮殿や寺院の華美精巧に驚嘆しつつも、むしろ街衢の汚濁、民家の敗損、原住民風俗の狡猾怠惰（トルコより提供された宿舍の接遇不行届の

因。)に強い印象を受けたらしく、また特に住民の多数が一眼乃至眇であること(市川はその原因を、降水量の僅少と飛砂に帰している)が目立つたらしい。

エジプト滞留は三日半を費やしているが、その中二月二十三日の滞在は、予定せぬものであつた。この日は三使のみマクドナルドの案内で、ピラミッド等の遊覧に出かけ、午前中に帰宿しており、また柴田等教人は宿舎構内で、乾燥地域に普遍的な駄獣であり彼等にははじめての、驢馬を試乗したりなどしている。その他の者も、それぞれカイロ市中見学などに出掛け、いわば余暇の一日でもあつた。しかしこれには事情がある。

二月二十日、オージン号スエズ着岸後間もなく、地中海における英迎艦ヒマラヤ号艦長が一行を訪問、挨拶があつたが、その折、使節の各国巡行の順序は、英仏兩國のうち、先ず最初に英国を訪問すべきの論を述べた。一行のかねてより(但し乗艦後決定)の意見は、仏を先にする予定であつたので、この齟齬から紛議が始まつた。二十日は一応日本側の事情を、電信(Tele)には早くも太平洋にまで海底電線が敷設されている)により英本国政府へ伝達することですつたが、日本側としてもこのため、一兩日をカイロに滞在することとなつた。二日を過ぎて二十三日、エジプト駐在英領事と外一名、同仏総領事が宿舎へ出て、共に自國先渡の論があつた。このため、

英国附添員マクドナルドも外出、初更過ぎて帰舎し、明朝四ツ時出発決定、かつ先後の順序は、英仏兩國政府の交渉により、その決をマルタ島に待つ、との予定を申し入れた。日本側はこれに困却し徹宵協議、暁方枕に就いている。二十四日朝出発準備の最中に、先日の約により仏総領事出頭し、本国からの決定間近きにより、今暫く滞在すべきことを強調し、議論が交された。結局、日本側は、此の間の仏側の主張を、書翰にて提出するよう求め、それに対する返翰を渡す旨を述べたところ、総領事は其の場で書翰を提出し、返翰はアレキサンドリアにて、仏側受領使に渡され度い旨を述べて引取つた。事の急に驚いた日本側は直ちに英領事を呼び出し、右の仏側との交渉経過を説明した。この事情から出立(予定は朝五ツ半ごろ)がおくれ、午後宿舎を引払つている。しかも午後九時にアレキサンドリアに待泊していたヒマラヤ号に塔乗した時、今度はマクドナルド及び艦長から、英国政府の決定として、「仏へ先渡」の旨を報らされ、種々説明を受けている。結局午前の仏総領事への日本側主張は、根拠を失つた形で、かつ仏の主張通りとなつた訳である。しかしながら一応返翰を草したが、仏側もこの決定を知つたためか受領使も来ないので、マルタ在留仏領事に、右返翰を渡すこととなつた。つまり、英側から「英国先渡」案を出したための紛糾で、当初からの予定通り「仏國先渡」に落着いた訳である。しかるに、二十八日、

マルタ着港に際し、駐在仏領事から、今度は、仏政府の日本使節歓迎手筈未整備の電報があつたとの理由で、「英国先渡」を申し入れた。日仏議論の応酬が数回繰り返され、翌日午前もまた談判決着せず、約による夕刻（仏領事は本国よりの決定を夕刻には受領する見込みある故、暫く猶余を申し入れていた。）にも、仏領事は単に、本国政府よりの命令も無いとの故をもつて以後の談判打ち切りと、唯使節一行のロンドンへの先渡を欲する旨を、マクドナルドに対して伝えて来た。日本側としては進退に窮し、翌三月一日に、仏領事をさらに呼ぶ予定としたところ、一日には又々変転して、仏政府にて使節入来を待つ旨を、人を介して伝えて来た。翌二日に至り仏領事は、「本国政府は意々日本使節を待ち受け、マルセーユ迄出迎えの係官を派遣して置く」旨の電報書を持参している。つまるところ、之また当初の予定通りに落着いた事となる。

この一連の経緯は、人により解釈に相違があろう。使節一行が、途中において「仏国先渡」に変更した点に根本原因があり、爾後連鎖的に齟齬が生じたわけであるが、さらに溯つて使節の日本出発前、既に仏との間になんらかの默契があつたと推察せざるを得ぬ観がある。しかも、仏側のマルタ駐在領事による「英国先渡申し入れ」は、いわば大いに「ぎこちなさ」を感じ取れる。使節一行の「仏国先渡」を、承知していた筈であるし、百歩を譲つても、この紛糾の前半部

（二十四日夜まで）の経緯により、仏政府に殆んど決定的に見えた「英国先渡」への予定変更が結果するものであろうか。ましてそれが、使節マルタ着港以後、正味二昼夜余の「時間を稼ぐ」ことにより逆転し、歓迎準備が整つた事実を考えれば、余程の偶然的理由以外に推定の余地がない。ここに、なんとしても日本側の外交的未熟さが示され、また当時の仏国外交の一特徴——すなわちナポレオン三世（1870 失脚。）の、国内人心收攬に焦慮することから海外に事を構えんとする野心を反映した、仏官憲の態度を見得るのではなからうか。

強大な海軍力という背景を持つ英が、前述の如くアジアへの進出を確実に進めたのに対して、陸軍国仏は、ナポレオン三世の出現以来、急激に軍事的活動を活潑化し、英のインド、ビルマに対して、緩衝国シヤムを挟んで、東方のインドシナに触手を伸ばしている。そしてあたかも 1868 は、仏のインドシナ経略早々の時期であつた。（サイゴン 1859 仏領。日本使節一行は帰朝の途次、仏艦エコー号により、サイゴン付近のサン・ジャック岬に寄港している。）仏の東進勢力は、その後のインドシナ経営、中国への進出、さらに下つてはいわゆる三国干渉に見られる。かくして、英仏二大勢力の対抗は明白な事実であるが、前記「英仏先後渡」の事件も、些末のことながらこの観点から考えられはせぬか。19世紀のアジアへの植民競争

の三大勢力英仏露が、極東の国日本に南北から集中し来つた形勢を思えば、些末なトラブルではあつても、永い鎖国の後の最初の日本使節を間に挟んで、相互に作爲的なものが感ぜられはせぬだらうか。

使節送迎をそれぞれ、往路——英艦、復路——仏艦と協定したことなども、また両国の競争を示すものであらう。而してアジア進出に、英の「後手に廻つた」仏が、その後の使節一行を当時第一のホテルに滞在せしめ、歓迎の儀も華やかに行なうなど、万事に派手に、恰も使節一行に対し、英のそれらと対比させるかにし向けながら、最初の調印は行なつていない(調印、62・10・2の再渡の折)。一方英においては、使節に対しては、いわば「常にかわらぬ」接遇であり、しかも開港開市延期を諒承して、倫敦寛書調印(62・6・6)のはこびとなつている。かつ延期承認の代替として、英国産物への関税減少という、後に大きな影響を及ぼす成果を獲得した。さらに調印直後に交渉残件(対馬問題につき、松平主張による)について会談を申し入れたのに対しては、「分袂の意を告し上は」として「面晤談判は一切断り」の返書を出している。この仏英の態度それぞれにも、前記のトラブルの経過と通じるものが感ぜられよう。使節一行としては、これ等の体験によつてさらに国際情勢の把握、とくに英の自信に満ちた態度と仏の対英競争的態度への理解が深められたと考えられる。

かくして三月五日(4・3)、一行はマルセーユ港に到着した。

六

遣米使節の場合と異なり、遣欧使節一行三十八名が、古い歴史を持ち、当時世界を牛耳る態のヨーロッパの六箇国を巡行したことは、それらの国々のアジアへの関心が高かつた時期だけに、直接的には帰朝後の幕府外交に、そして明治新政府のそれに、さらに大きく日本の歴史の方向に、如何に大きな影響を与えたことであらうか。以後の幕府外交は仏に依存する傾向を持ちながらも、英との均衡に腐心する点など、あるいは留学生派遣や物資購入(例えば製鉄所建設資材)などにも見ることが出来る。攘夷の風潮の熾烈化する半面では、早くも使節帰国の翌年の文久三年五月長州藩士井上聞多、伊藤俊輔等が幕禁を犯して英国へ留学している。また翌慶応元年の森金之丞(有礼)等の薩摩藩士、同二年の肥前藩士馬渡八郎等の同様の行動は、遣欧使節随員の顔ぶれと見較べる時、決して無縁のものとは思われない。幕府自体においても、慶応二年に派英留学生のことがあつた。これら幕臣の子弟の中には、箕作の二子が入つており、又、福沢の弟の名も見える。幕府にとりこれらの人々は直接役立たなかつたが、前記諸藩の士等と共に、維新後、新政府の建設事業各般にわたり、多大の貢献をしているのである。

were Slavs. But if the term "Saqualiba" were applied to the Slavs only, Ibn-Khurdadhbih's description is contradictory to that of the other Arabic writers, such as e.g. Ibn-Fadhlān, Ibn-Rusta, Mas'udi, al-Istakhri, Gardezi, etc. In this case we could not regard Khurdadhbih as a credible source. And if that term had a wider meaning, we could not prove by this Khurdadhbih's description that the Rus' were equal to the Slaves.

Some Remarks on the "*Shibata Takenaka Ôkô*
Nissai 柴田剛中歐行日載"

by

Susumu Kimizuka

In order to postpone the foreigner's residing period in *Edo* 江戸 and *Osaka* and to open the ports of *Niigata* 新潟 and *Hyôgo* 兵庫, the party, led by *Yasunori Takeuchi* 竹内保徳, was sent to the six countries in Europe, such as France, England, Holland, Prussia, Russia and Portugal, from 1862 to 1863; this meant the first travel to Europe after a long national isolation and the important mission of investigating the condition of these countries with which our country had many diplomatic problems.

According to the diary of *Takenaka Shibata*, chief attendant, we can divide their whole travel into four parts, (1) the outward travel, (2) the round travel of the five countries beside Portugal, (3) re-entrance into Prussia and France, and (4) the return travel. This article treats the section (1) the outward travel. After the sailing from *Edo* 江戸 on January 21st, through *Nagasaki* 長崎, they stayed for a week in Hong Kong to investigate conditions there, this long stay which was under the influence of the Civil war in America. And then, passing Singapore at first and other points for the English advance to Asia, through Egypt of the then Turkish territory (under the construction of Suez Canal), they reached Marseilles on April 3rd. On the way they investigated in Singapore they investigated the Boxer Rebellion and in Egypt and Malta some trouble happened

between France and England about the problem whether first landing place should be France or England. Through these experiences they had their international sense more improved.